

坑夫の子

葉山嘉樹

青空文庫

発電所の掘鑿は進んだ。今はもう水面下五十尺に及んだ。

三台のポンプは、昼夜間断なくモーターを焼く程働き続けていた。

掘鑿の坑夫は、今や昼夜兼行であつた。

午前五時、午前九時、正午十二時、午後三時、午後六時には取入口から水路、発電所、堰堤と、各所から凄じい発破の轟音が起つた。沢庵漬の重石程な岩石の破片が数町離れた農家の屋根を抜けて、囲炉裏へ飛び込んだ。

農民は駐在所へ苦情を持ち込んだ。駐在所は会社の事務所に注意した。会社員は組員へ注意した。組員は名義人に注意した。名義人は下請に文句を言つた。

下請は世話役に文句を云つた。世話役が坑夫に、

「もつと調子よくやれよ。八釜しくて仕様がないや」

「八釜しい奴あ、耳を塞いどけよ」

「そうじゃねえんだ。会社がうるせえんだよ」

「だったらな。会社の奴に、発破を抑えつける奴を寄越せとそう云つてくんな。おらにや、ダイナマイトを抑えつけるてな、芸当は打てねえんだからってな。篋棒奴！ 発破と度

胸競べなんぞ、真つ平だよ」

こんな訳であつて、——どんな訳があろうとも、発破を抑えつけるなんて訳に行くものではない——岩鼻火薬製造所製の桜印ダイナマイト、大ダイ六本も詰め込んだ発破は、素晴らしい威力を発揮した。濡れ蓆位被せたつて、そんなものは問題じゃなかった。

鶏冠山砲台を、土台ぐるみ、むくむくつとでんぐりがえす処の、爆破力を持ったダイナマイトの威力だから、大きくもあろうか？

主として、冬は川が涸れる。川の水が涸れないと、川の中の発電所の仕事はひどくやり難い。いや、殆んど出来ない。一冬で出来上らないと、春、夏、秋を休んで、又その次の冬でないと仕事が出来ない。

一冬で、巨大な穴、数万キロの発電所の掘鑿をやるのには、ダイナマイトも坑夫も多量に「消費」されねばならなかった。

午後六時の上り発破の時であつた。

昼過ぎから猛烈な吹雪が襲つて来たので、捲上の人夫や、捨場の人夫や、バラス取り、砂揚げの連中は「五分」で上つてしまった。

坑夫だつて人間である以上、早仕舞いにして上りたいのは、他の連中と些も違いはなか

った。

だが、掘鑿は急がれているのだ。期限までに仕上ると、会社から組には十万円、組から親方には三万円の賞与が出るのだ。仕上らないと罰金だ。

何しろ、ポンプへ引いてある動力線の電柱が、草見たいに撓^{たわ}む程、風が雪と混って吹いた。

鼻と云わず口と云わず、出鱈目に雪が吹きつけた。

ブルツ、と手で顔を撫でると、全で凍傷の薬でも塗ったように、マシン油がベタベタ顔にくっついた。そのマシン油たるや、充分に運転しているジャックハムマーの、蝶バルブや、外部の鉄錆を溶け込ませているのであったから、それは全く、雪と墨と程のよい対照を為した。

印度人の小作りなのが揃って、唯灰色に荒れ狂うスクリーンの中で、鑿岩機を運転しているのであった。

ジャックハムマーも、ライナーも、十台の飛行機が低空飛行をでも為ているように、素晴らしい勢で圧搾空気を、ワルブから吹き出した。

コムプレッサーでは、ゲージは九十封度に昇っていた。だから、鑿岩機の能率は良かった。

た。

「おい、早仕舞にしようじゃないか」

秋山と云う、ライナーのハンドルを握つてるのが、小林に云った。

それは、鑿岩機さえ運転していないで、吹雪さえなければ、対岸までも聞える程の大声であつた。そして、その小林は、秋山と三尺も離れないで、鑿^{のみ}の尖の太さを較べているのだつた。

「駄目だよ。あのインダラ鍛冶屋は。見ろよ、三尺鑿よりや六尺鑿の方が、先細と来てやがら」

小林は、鑿の事だと思つて、そんな返答をした。

「チヨツ！」

秋山は舌打ちをした。

——奴あ、ハムマーを耳中に押し込んでやがるんだ、きつと、——そう思つて、秋山は口を噤んだ。

秋山は十年、小林は三十年、坑夫をやつて来た。彼等は、車を廻す二十日鼠であつた。彼等は根限り駆ける！すると車が早く廻る。ただそれ丈けであつた。車から下りて、

よく車の組立を見たり「何のために車を廻すか？」を考える暇がなかった。

秋山も小林も極く穏かな人間であった。秋山は子供を六人拵えて、小林は三人拵えて、秋山は稍^{やや}ずるく、小林は掘り出した切り株の如く「飛んでもねえ世の中」を渡っていた。

「何て、やけに吹きやがるんだ！ 畜生」

小林はそう云って、三尺鑿の先の欠けた奴を抛りだした。

秋山は運転を止めた。

「オイ、もう五尺は入っただろう」

ガラガラツとハンドルを廻しながら、六尺鑿を抜き出した。

小林は前へ廻って、鑿を外しながら、

「エツ」と云った。

「もう五尺は入っただろう」

「そうさなあ、入ったかも知れねえな」

「早仕舞にしようじゃないか」

「いいなあ、ハムマーの連中にそう云おうかなあ」

「だが、ダイの仕度は出来てるかい？」

「どうだか。見張りで聞いて来らあ」

「いや、構わねえ。お前、機械を片付けといて呉れよ。俺が仕度して来るから」
「そうかい」

秋山は見張りへ、小林は鑿を担いで鍛冶小屋へ、それぞれ捲上の線に添うて昇つて行つた。何しろ、兎に角火に当たらないとやり切れないのであつた。

ライナーの爆音が熄^やむと、ハムマーの連中も運転を止めた。

秋山は陸面から八十尺の深さに掘り下げた、彼等自身の掘鑿を這い上りながら、腰に痛みを覚えた。が、その痛みは大して彼に氣を揉ませはしなかった。何故ならば、それはいつでもある事だつたから。

ダイの仕度は出来た。

二十三本の発破が、岩盤の底に詰められて、蕨のように導火線が、雪の中から曲つた肩を突き出してゐた。

五人の坑夫、——秋山も小林も混つて——は、各々口にバットを啣えて、見張からの合図を待っていた。

何十年も、殆んど毎日のように、導火線に火を移す彼等であっても、その合図を待つ時

には緊張しない訳には行かなかった。

「恐ろしいもんだ。俺なんざあ、三十年も銅や岩ばかり噛って来たが、それでも歯が一本も欠けねえ」

「岩は、俺たちの米のおまんまだ」

と云う程、慣れ切った仕事であつたのに、それでもその一瞬間は、たとい夏であつても体のどこかに、寒さに似たものを感じるのであつた。

見張りで、ベルをガラン、ガランと振り始めた。吹雪の呻りとベルの音とが、妙に淋しくこんがらかつて、流れて行つた。

ジゴマ帽から、目と口と丈け出した五人の怪物見たいな坑夫たちは、ベルが急調になつて来て、一度中絶するのを、耳を澄まし、肩を張って待つた。

ベルが段々調子を上げ、全で余韻がなくなるほど絶頂に達すると、一時途絶えた。

五人の坑夫たちは、尖つたり、凹んだりした岩角を、慌てないで、然し敏捷に導火線に火を移して歩いた。

ブスッ！ シュー、と導火線はバットの火を受けると、細い煙を上げながら燃えて行つた。その匂は、坑夫たちには懐しいものであつた。その煙は吹雪よりも迅くて、濃かつた。

各々が受持った五本又は七本の、導火線に点火し終ると、駈足で登山でもするように、二方の捲上の線路に添うて、駆け上った。

必要な掘鑿は、長四方形に川岸に沿うて、水面下六十尺の深さに穴を明ける仕事であつた。

だから、捲上の線は余分な土や岩石を掘り取らないように、四十五度以上にも峻嶮に、川上と川下とから穴の中に迂り込んでいた。そして、それはトロツコの線路以上に広くは幅を取つてなかつた。

これ等の事は、設計の掘鑿通り以外に、決して会社が金を出しはしない、と云う事に起因していた。何故かなら会社で必要なのは、一分一厘違わず、スポツとその中へ発電所が嵌りさえすればいいのだったから。

川下の方の捲上げ道を登れば、そのまま彼等は飯場まで帰る事が出来た。飯場には吹き曝しであるにしても風呂が湧いていた。風呂は晩酌と同じ程、彼等へ魅力を持っていた。

川上の方は、掘鑿の岩石を捨てた高台になつていて、ただ捲上小屋があるに過ぎなかつた。その小屋は蓆一枚だけで葺いてあつた。だから、それはただ気休めである丈けではあつたが、猶、坑夫たちはそこを避難所に当てねばならなかつた。と云うのは、そつちに近

い方に点火したものは、そつちに駈け登る方が早かったから。

秋山は、ベルの中絶するのを待つている間中、十数年来、曾てない腰の痛みに悩まされていた。その時間は二分とはなかった、が彼には二時間にも思えた。

秋山は平生から信じていた。導火線に火を移す時は、たといどんな病気でも、一時遠慮するものだ、と。それは足を打ち貫かれた兵卒が、歩ける訳がないのに歩くのと同じだと思ひ込んでいた。そして、それは全く、全然同じとは云えないにしても、全然違ってはいなかった。

彼はベルの中絶した時に、導火線に完全に火を移し了へした。

然し、彼が、痛いのは腰だ、と思つていたのに、川上の捲上線に伝つて登り始めると、カツキリ同時に、その腰の痛みが上の方に上つて来るのを覺えた。

彼は、駈けていた積りであつたのに、後から登つて行く小林に追いつかれた。

然し、一体、駈れた坑夫は、そんなに逃げるように慌てて、駈けはしないものだ。慌てて石に躓く事がある事を知っているからだ。

小林は、秋山よりも、もつと熟練工であつた。だから、彼とても特別に急ぐような、見つともない事はしない。だが、「少し悠くりしすぎる」と思はずにはいらなかった。

「おい。もう、半分燃えてるぞ！」

と、小林はすぐ後ろから、秋山へ喚いた。

が、秋山は、云わば、彼の痛い所を覗き込んででもいるように、その眼は道を見てはいなかった。

吹雪も、捲上道路も、何も彼は見ていなかった。何の事はない、脱線して斜になった機関車が、惰力で二十間も飛んだ、と云った風な歩きつ振りであつた。

小林が彼と肩を並べようとする刹那、彼は押し潰した畳みコップのように、ペシヤツとそこへ跼つた。

小林はハツとした。

と、同時に川上の捲上の方を見た。が、そつちは吹雪に遮られて、何物も見えなかつた。よし、見えたにしても、もう皆登り切つて、風呂に急いでいる筈であつた。

風が、唸つた。雪が眼の中に吹き込んだ。

「オイ、駄目だ。どうした！」

秋山は動かなかつた。

「オイ、もう直ぐだ。もうちよつとだ。我慢しろ！」

秋山は動かなかった。

咄嗟に小林は、秋山を引つ担いだ。

然し、一人でさえも登り難い道を、一人を負つて駆けける事は、出来ない相談だった。

彼等が、川上の捲上小屋へ着く前に、第一発が鳴った。

「ハムマー穴のだ！」

小林は思った。音がパーンと鳴ったからだ。

ド、ドワーン！

「相鳴りだ。ライナーだな」

二人は、小屋の入口に達していた。

ドドーン、ドドーン、ドーン、バラバラ、ドワーン

小林の頭上に、丁度、彼自身の頭と同じ程の太さの、滅茶苦茶に角の多い尖った、岩片が墜ちて来た。

小林は、秋山を放り出して、頭の鉢を抱えた。

ドーン、バーン、ドドーンー

発破は機関銃のように続いて、又は速射砲のようにチョット間を置いて、鳴り続けた。

やがて、発破は鳴り止んだ。

海拔二千尺、山峽を流るる川は、吹雪の唸りと声を合せて、泡を囓んでいた。

物の音は、それ丈けであつた。

掘鑿の中は、雪の皮膚を蹴破つて大地がその黒い、岩の大腸を露出していた。その上を、悼むように、吹雪の色と和して、ダイナマイトの煙が去りやらず、匍いまわっていた。が、やがて、小林と秋山とが倒れている川上の、捲上小屋の方へ、風に送られて流れて行った。が、上に上ると、それは吹雪と一緒に飛んで行った。

発破の後は、坑夫が一応見廻らねばならぬことになっていた。それは「腐る」（不発）のがあると、危険だからであつた。

その見廻りは小林がいつでも引き受けていた。が、此場合では小林はその役目を果す事は出来なかつた。

時間は、吹雪の夜そのもののように、冷酷に経つた。余り帰りが遅くなるので、秋山の長屋でも、小林の長屋でも、チャンと一緒に食う筈になっている、待ち切れない夕食を愈々待ち切れなくなつた、餓鬼たちが騒ぎ出した。

「そんなに云うんだったら、帳場に行つてチャンを連れて来い」

と女房たちが子供に云つた。

小林と秋山の、どつちも十歳になる二人の男の児が、足袋跣足でかけ出した。

仕事の済んでしまつた後の工事場は、麗らかな春の日でも淋しいものだ。それが暗い吹雪の夜は、況して荒涼たる景色であつた。

二人の子供は、コムプレッサー、鍛冶場、変電所、見張り、修繕工場、などを見て歩いたが、その親たちは見当らなかつた。

深い谷底のような、掘鑿に四つの小さい眼が注がれた。坑夫の子供ではあつても、その中へは入る事が許されなかつたし、又、許されたとしても、そこがどんなに危険であるかは、子供の心にも浸み込んでいた。

「穴ん中にやいないや、捲上小屋にいるかも知れないよ」

小林の子が、小さな心臓を何物とも知れぬ不安に締めつけられながら言つた。

二つの小さな姿が、川岸伝いに、川上の捲上小屋に駆けて行くのが、吹雪の灰色の夕闇の中に、影絵のように見えた。

二人の子供たちは、今まで、方々の仕事場で、幾つも幾つも、惨死した屍体を見るのに

馴れていた。物珍らしそうに見ていたので、殴り飛ばされたりした事もあった。

けれども、自分の父親が、そんな風にして死ぬものとは思わなかった。なのに、今、二人の十になる子供は、その父親の首へしがみついて、夕食の席へ連れ帰ろうとでもするようになり、努力していた。

が、秋山も小林も、決して、その逞しい足を動かし、その手を延ばそうとはしなかった。僅に、滅茶苦茶に涙を流しながら、引き起そうとする子供の力だけ、その冷たい首を上げるだけであった。

それでも、子供たちは、その小さな心臓がハチ切れるように、喘いでいるのにその屍体を起すことにかかっていた。若し、飯場の人たちが、親も子も帰らない事を氣遣って、探しに来なかったならば、その親たちと同じ運命になるのであったほど、執拗に首を擡^{もた}げる事を続けたであろう。

飯場の血気な労働者たちは、すっかり暗くなつた吹雪の中で、屍体の首を無理にでも持ち上げようとする、子供たちを見て、誰も泣いた。

青空文庫情報

底本：「日本プロレタリア文学全集・8 葉山嘉樹集」新日本出版社

1984（昭和59）年8月25日初版

1989（平成1元）年3月25日第5刷

初出：「解放」

1926（大正15）年5月号

入力：林 幸雄

校正：伊藤時也

2010年1月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

坑夫の子

葉山嘉樹

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>